

新しいふれあい社会

認定NPO法人東葛市民後見人の会

～あなたも私もゲートキーパーです～

障害者委員会だより（月報）

事務局 我孫子市湖北台 6・5・20

平成 26 年 4 月発行（創刊号）

Tel/Fax 04-7187-5657

精神保健福祉士

榎場 雅子

ゲートキーパーは心の門番です

唐突ですがゲートキーパーという言葉が身近に感じたことがありますか。言葉としては、直訳すれば門番、転じて家庭を守る人、マスメディアではニュース記事等の情報を取捨選択する責任者と理解されています。ところが近年、身近な人を自殺の危機から守る市民活動に取り組んでいる人を指すようになりました。そこには周知されていない謂われがあります。

日本の自殺者は、1998年に年間3万人を超え、その後も毎年3万人を上回っていました。この重い現実を受けて、公的にも自殺予防対策協議会が設けられ、「自殺を社会全体で防ぎましょう」をキャッチフレーズに自助・共助・公助相俟った対応が、地道にしかし確実に、進められています。この草の根的活動に黙々と取り組んでいる市民を「ゲートキーパー」と呼ぶようになったのです。

因みに、一昨年（2012年）の自殺者は、13年ぶりに3万人を割りました。昨年度も引き続き3万人を割っています。ニュースの取材に際し、ゲートキーパーのA氏は、「自殺は、身近な問題です。今こそ自分でできる事から防止しなければなりません。身近な人の変化に気づいたら、こちらから迷わずに、さりげなく声をかけます。それだけでも先方は「自分は独りではない」と気付いてくれます。ひたすら話を聴いていると、互いに『わかりあえた』と感じる一瞬があります。そんな時、こちらが救われた思いがします」と答えていました。この一連のニュースは心を打つものがあり、A氏の話は範に垂れるものだと思います。

ところでゲートキーパーは、身近な人を自殺危機から守る市民活動だけのものでしょうか。そもそも、自殺の原因の大多数は健康問題で、そのうちの大半は心の問題で占めています。その背景には、モビリティの高い社会と言われる今日、古くから同じ所に住んで、代々にわたって長らくつき合ってきた、地縁による結び付きが希薄になってしまった事にあります。一方、「21世紀は家族制度の崩壊」と言われて、二世代三世代が共に暮らす大家族は珍しく、核家族が一般的となり、親兄弟による血縁の結びつきもドライになってしまいました。

加えて、少子高齢化という言葉が現代日本の社会問題を象徴しているようになってしまい、高齢者の独居、老々介護、離れ住む老親の介護、果ては孤独死など高齢者の問題は深刻です。翻って、若い母親の育児不安、放棄や虐待、さらには若者のモラトリアム、職場不適応等々、多種多様な問題が投げかけられて、支援が求められています。この場合の支援とは、物質、金銭、労働提供など具体的手段の提供だけでなく、信頼感、親和感、安心感などの情緒面の支えに加え、情報提供を含めた人間関係全般を指しています。それはかつての血縁・地縁による「よき絆」に他なりません。この希薄になった血縁・地縁に代わるべく、身近にあって温かくふれあう地域社会は、すばらしいと思いませんか。そして、それは誰しもが望むところではないでしょうか。